

『大菩薩峠』と現代文学との連関

中里介山その創世界

遠藤誠治

Endo Seiji

オリジン出版センター

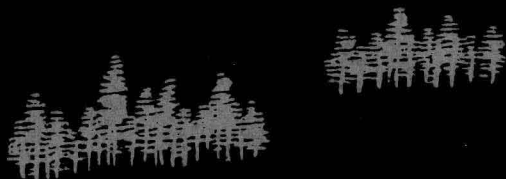


中里介山 その創世界

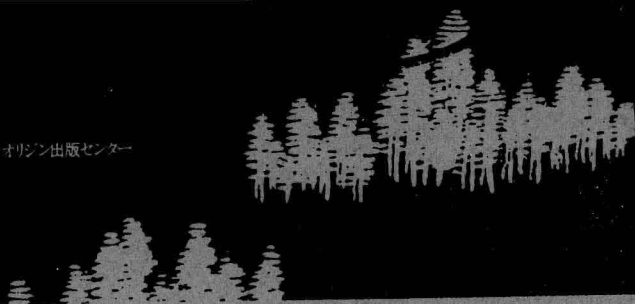
『大菩薩峠』と現代文学との連関

Endo Seiji

遠藤誠治



オリジン出版センター



著者略歴

遠藤誠治（えんどう・せいじ）

昭和12年（1937年）、東京都に生まれる。1960年3月早稲田大学第一文学部国文科卒業。近世俳諧を中村俊定先生に、近代文学を稲垣達郎先生に学ぶ。現在、東京都立砂川高校教諭。俳文学会、日本文学協会、昭和文学会所属。

著書

『増補 梶井基次郎とその周辺』（1983年12月、近代文藝社）

論文

「一茶・成美・一瓢」

（『鑑賞日本古典文学』〈蕪村・一茶〉（角川書店）所収）

「夏目成美論」

（『俳句』（角川書店）1978年2月号）

「夏目成美私感」

（『俳句』1978年7月号）

「森鷗外『還東日乗』におけるシラー、蘇東坡、高青邱への言及の意味」

（『鷗外』第40号（昭和62（1972）年1月刊））

中里介山 その創世界

1994年2月23日 発行

著者 遠藤 誠治

発行者 武内 辰郎

発行所 (株)オリジン出版センター

〒162 東京都新宿区岩戸町16 メジャー神楽坂402

電話 (03)3260-0453

FAX (03)3267-8697

装幀 ローテ・リニエ

印刷 K M S

落丁本・乱丁本はお取り替えます

ISBN 4-7564-0182-1

中里介山　その創世界――目次

第一部 中里介山の作品の成立

幸田露伴と中里介山・序説……………	7
——二つの「雪たたき」を軸として……………	
『高野の義人』論……………	25
『氷の花』とその周辺……………	44
「雪山陵夷」について……………	66
「笛吹川」雑考……………	94
——ドーデー「星」との関係、その他……………	
中里介山の「女性観」の源流……………	107
——「笛吹川」を軸として……………	
『百姓弥之助の話』第三冊「土を読むの巻」雑考……………	126
「燈籠大臣」の成立をめぐる……………	149

第二部 中里介山と現代文学

『潮騒』から『万延元年のフットボール』まで……………177

——堀田善衛『鬼無鬼島』と『大菩薩峠』との関連

島尾敏雄と中里介山……………194

宮沢賢治「風の又三郎」の一側面……………216

——『大菩薩峠』との関係を中心に

第三部 中里介山雑考

中里介山と西松次郎と羽村亀吉……………235

——奇人の系譜

介山のユートピア……………243

——「姉弟島」のこと

吉川英治記念館の印象	249
------------	-----

——樹齡六百年の椎の木と吉川英治

介山雜考二題	252
--------	-----

補遺 五味康祐

五味康祐「喪神」論	259
-----------	-----

——伊東静雄、宮沢賢治、リルケ、坂口安吾との関連を中心に

五味康祐『薄桜記』における死生観	285
------------------	-----

——謡曲の詞章の挿入法をめぐって

あとがき	315
------	-----

第一部

中里介山の作品の成立

幸田露伴と中里介山・序説

——二つの「雪たたき」を軸として

序

いわゆる近代文学に逆行する作家として、幸田露伴と中里介山とが並称されるようになったのはいつのころからなのか。正宗白鳥の「幸田露伴」（昭和三年二月発表、『作家論』所収）あたりが最初ではあるまいか。

正宗白鳥は次のように述べている。

へ 私は、「大菩薩峠」を第一巻だけ通読した。（中略）

何だか、「天うつ浪」を打留めにした古風な小説が、自然主義系統の文壇小説跋扈の間に、地底にくぐつて、「大菩薩峠」のやうな形を取つて新たに現はれたやうな気がする。露伴氏の作品に男性的気魄があるのなら、中里介山氏の作品にもそれがある。それに、どちらも仏教臭い。仏教臭いところが、また伝統的に日本人に有難がられるのである。第一巻だけを読んでも、

以前の露伴氏の作品の風格に似たものが感ぜられる。」

正宗白鳥は露伴の『天うつ浪』について、〈旧文学最後の大作として、文学史上に跡を止むるものであつた。〉と述べている。この露伴・介山を並べて見る考え方は、保田与重郎を経て三好行雄氏、篠田一士氏にまでつづいている。

三好氏は『中里介山全集』第十七卷（昭和四六年刊）の月報の「やぶにらみの介山論」で、へとびぬけて巨大というわけではない。しかし、文学史の評価から逸脱した興行きがふかくて、なかなかの史的体系化などをうけつけぬ強靱な個性、といえはすぐに思いうかぶのは幸田露伴だろうが、おなじように、文学史家の手持ちの方法をよせつけぬ幅と興行きが、中里介山の世界にも望見できる。その不吉な予感が露伴や介山を避けて通らせるのであって、それは見たくないものが見えなくなるという、一種の心理的な視覚遮蔽に似ている。〉と述べたあと、〈西洋への感覚が欠如している〉ところに介山の露伴との差はあつたのかもしれない、と記している。この〈西洋への感覚〉の有無は、介山・露伴の対比をする本論では非常に重要な視点である。のちに触れるつもりである。

三好氏との対談（『国文学』昭和四九年三月号）に於て、篠田一士氏は、〈本当をいうと、たとえば「天うつ浪」から「大菩薩峠」へつながる線がある程度認められればいいんですけれど、これを探るのは大変だろうと思いますよ。〉と述べる。——これは、正宗白鳥の発想と似てはいるが、白鳥が前近代として否定しようとするものを、改めて問いなおそうとする点に、篠田氏、または

現代の文学観と白鳥のそれとの相違がうかがわれる。

介石と露伴とは似たものを内包しているが、三好行雄氏も述べたように、果たして全く同じであらうか。両者の同質性を考えると共に、その異質性を考察することも大切と思われるのだ。

一

中里介石の「雪たゝき」というと、ほとんどの人は露伴の「雪たたき」のまちがいと考えるであらう。しかし、むしろ、介石の「雪たゝき」の方が、露伴の「雪たたき」よりも前に書かれ、発表されているのである。

幸田露伴が昭和十四年三・四月号『日本評論』に載せた「雪たたき」は、露伴七十三歳の底力の、しずかに力づくよくこめられた傑作である。世評もいよいよ高い。

これに対して、介石の「雪たゝき」は、大正十二年五月十六日と同年七月十九日、『アサヒグラフ』に連載された『隣人夜話』十一篇のうちの一篇で、このとき介石三十八歳。しかも、『隣人夜話』の狙いは〈家庭子女の読物にふさはしいもの〉なのである。介石のこのような条件からして、露伴の「雪たたき」と対比するのは酷なものはあるが、しかし、同一の材源による作品、しかも同じ題名の作品（ただし、介石は「雪たゝき」、露伴は「雪たたき」と表記。もとの話は「雪タ、キ」とあり、介石と同じ）の対比を通して両者の本質を見きわめることもできると考えるが、『中里介石全集』第十六巻の尾崎秀樹氏の解説も「雪たゝき」には言及していない。

「雪たたき」または「雪たゝき」の原話は、『史籍集覽』所収の「足利季世記」卷一「畠山記」の「雪タ、キノ事」と題するものである。次に全文引用する。

へ雪タ、キノ事

畠山尾州ノ嫡子尚慶ハ大和ノ奥郡ニカクレテオハシケル、カノ侍木沢ト云モノ有、尾州殺害後如何ニモシテ主ノ本意ヲ達シ尚慶ヲ二度河内エ返シ入バヤト骨ズイニ徹シ思ヒケル、其志ヤ天ニ通ジケン、和泉ノ境エ落行、アキ人ニ成テ日ヲ送りケル、或時大雪降シ時ナヤト云アキ人ノ門ヲトヨリケルニ、夜イタクフケテ後ニ、アシダニ雪ノツキケルヲ名屋ガ小門ノ板ニテタ、キテ落シケレバ、内ヨリ戸ヲ開テ袖ヲ引テ行モノアリ、クラクテアヤシケレバ、音モセズシテ、奥エ入ケレバ、屏風の中エ引入テ後女房二人火ヲトモシ持チ来リテ此男ヲミテ、アキレタル風情ミヘタリ、是ハ、ナヤト云町人、高麗エセウバイニ渡リケル留守ノ間ダ、夜ナ／＼他ノ人、ナヤガ妻ノモトエカヨヒケル忍妻（夫カ）アリケリ、カノ忍ブ男ノ門ヲタ、クト思ヒ、木沢ヲ引入タル、扱テ木沢此アリサマヲ見テモウシケルハ、我ハ此屋ノ主ト知人ナリヤトテ、高麗ヨリ帰ラバ、此由ヲ申スベシト云ヒケレバ、主ノ女房手ヲ合テ詫ビナゲキテ、金銀ヲ持来テイロ／＼ナダメカヘシケレドモ、金銀ヲバトラズシテ、床ニアリシ笛ヲ取りテ帰リケリ、程ヘテナヤ高麗ヨリカヘルベキヨシ先立テ申来ル、家ノ中掃地シケルニ、カノナヤガ秘藏シケル笛不見、不思議ニ思ヒ、カレ是ト尋ケル、或ル女申ハ、イツゾヤノ夜ノ男コソ笛ヲ懷中シケルカトテ、カノ男ヲ委ク尋ケレバ、木沢ガモトニ笛アリ、木沢申ハ、是非共ニ此事ナヤニ申スベシ、

笛ヲセウコニスベシト云、カノ女ノ父ベニヤ（紅屋ノ事）ト云モノ是ヲキ、木沢ガモトニ来リ、吾ガ娘ノ命ヲ助ケ給ヘ、笛ヲ返シ給ハレトナゲキ申ス、サラバ吾望事ヲ達シ給ハマ笛ヲカヘサント云、ベニヤ答テ申ハ、何ヤウノ事ヲモ背マジト誓言ス、木沢申シケルハ、吾ハ故畠山尾張守ノ家人ナリ、主ノ本意ヲ達シ事ヲ計ル心今ニアリ、河内ノ平野ニ桃井兵庫トアリシヲ打タント思立也、其時兵糧ナクシテ、不叶、其時分必ズ頼ムベシトテ臙脂屋エ返シケリ、其後杉原斎藤丹下貴志宮崎安見木沢杉原遊佐河内守ヲ初トシテ牢人衆ヲ臙脂屋ガモトエ集メ、案内ハ委ク知リケレバ、平野ヲ夜討シテ桃井一色ヲ打取ケリ、尚慶ハ本意ヲ達シ、河内ノ高屋ハ安閑天皇ノ御廟ナリシヲ要害ヨケレバトテ城ニ築キ立ラレケリ（濁点、読点は引用者による）

介山の「雪たつき」は、主君への忠義のために、堺の商人の妻の姦通を利用する木沢をそのまま肯定的に描いた、一種の奇談である。原話をそのままくだけた語り口にしたもので、『篝火』（大正七年）執筆の副産物と考えられるものである。結末は（再び（畠山の）家運を開いたのは木沢が奇巧第一に居るといはれてゐる。）と結ばれ、冒頭の（慣れぬ商人の身となつて、市塵に膝を屈するもの（中略）時節到来すれば尾張守殿を助けて兵を起し、再び正覚寺の城を乗つ取つて畠山家を起さんが為に、臥薪嘗胆の試練に耐へてゐるわけなのだ、事を起すには今の場合、何物よりも軍用金が必要なりと知ればこそ、身を町人に落として利を見るの手段が知りたいのだ。）と首尾照応するのである。いうなれば、室町時代の忠臣蔵的な物語である。

これに反して、露伴の「雪たたき」の木沢は、世の中の動きに対して醒めた目を持ち、世俗の

道義觀の表裏を鋭く見ぬいている。

冒頭からして、露伴の創造した木沢は、〈余程肚の中がむしゃくしゃして居て〉〈悪氣〉を〈噴出〉させている人物として登場する。うそで固めた世の中へのむしゃくしゃであることは、全篇通読すれば、すぐ判る。介山の木沢が忠義一点ばりであるのとは全くちがう。

主人の姦通を木沢に見ぬかれて、必死で主人を守ろうとする召使の女は露伴の「雪たたき」に於て重要な人物である。〈真実はおもてに現はれて、うそや飾りでは無いことは、其の止途無い涙に知れ、そして此の紛れ込者を何様にして捌かうか、と一生懸命真剣になつて、男の顔を伺つた。目鼻立のパラリとした人並以上の器量、純粹の心を未だ世に濁されぬ忠義一図の立派な女であつた。〉と描かれる召使いの女について、しかし、木沢は次のように考える。——〈この女めも、弁口、取りなし、下の者には十二分の出来者^{できもの}。しかも生命を捨てゝもと云居つた、うその無い、あの料簡分別、ア、立派な、好い侍、かはゆい、忠義の者ではある。人に頼まれたる者は、然様なうては叶はぬ。高禄をくれても家隸に有ちたいほどの者ではある。……しかし大すぢのことが哀れや分つて居らぬ、致方無い、教への足らぬ世で、忠義の者が忠義でないことをして、忠義と思うて死んで行く。善人と善人とが生命を棄てあつて、世を乱してゐる。エーツ忌々しい〉——このことばは、〈其の損得といふ奴が何時も人間を引廻すのが癪に障る。〉〈癪に触る。損得勘定のみに賢い奴等、かたッぱしからたゝき切るほかは無い〉〈道も知らぬ、術も知らぬ、身柄家柄も無い、頼むは腕一本限りの者に取つては、氣に食はぬ奴は容赦無くたゝき斬つて、時節到

てもよいであろう。

介山の描いた木沢は、己をふりかえる自意識を持たず、ゆえに、忠義な行爲と思ひ込んで、不義の女とその父親をゆすりにかけるわけである。露伴の描く木沢はそうはできない。真の〈忠義〉が利害損得を超越したものであるならば、不義の女とその父親をゆすることが得になると判つていればいるほど、絶対にできぬことであつたのだ。真の道義を貫こうとする木沢の憤怒と自嘲の影が露伴の「雪たたき」にはたちこめている。

〈何の為にもなり申さぬ〉からこそ、笛を不義の女の父親に渡すまいとする木沢と、〈何の為にもならぬことに、いやと申し張らるゝこともござるまい。〉と平然としていきる同志丹下右膳たちとの対決は、露伴と俗世間の道義観との対決の象徴でもあつたはずである。

大正時代の〈倦怠^{アンニユイ}〉から昭和の〈自意識〉へと文学の流れがうつつてゆくのを反映するかのうちに、露伴の「雪たたき」中に、召使の心理描写に〈自意識〉ということばが用いられているが、しかし、ここには芥川、小林秀雄、横光利一、太宰治、三島由紀夫等の根底を流れる〈自意識〉のデカダンスの世界は存在しない。露伴の道義観がつよく健康に流れている世界である。露伴のそれを木沢も持つ。

介山は「雪タ、キノ事」を紹介したにすぎない。露伴は原話のままでは気がすまなかつた。原話の木沢への、〈透徹の批評〉から、露伴は新しい〈木沢左京〉を創造したのである。この木沢には、古い〈忠義〉と真の〈道義〉とのあいだで苦しみ、意地をとおす近代人の苦悩の世界がか